

プロジェクト材木座with相模

もよぶ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

材木座が意図せず相模や川崎を陰から支えトラブルを乗り切る話です。

比企谷達はわき役です。

pixivにも投稿しています。

目次

第一話	
第二話	
第三話	
第四話	
第五話	
第六話	
第七話	
第八話	
第九話	
第十話	
第十一話	
第十二話	

第一話

夏休みも開けたとある日、今日も材木座は一人である。

そして今日は暑さも和らいでおり屋上にて一人飯である。

購買のパンを頬張つてると三人の女子がおしゃべりしながら屋上に入ってきた。

「我的一人静かな時を邪魔するとは万死に値する」

とボソッと呟くが無論何ができるわけでもなくスマホをいじりつつモソモソとパンを頬張る

「ねえ遙なんかキモいのがいるんですけど」

「ホントだ」

「ねえゆっこ、話しかけてきなよ」

「えー、南いきなよー」

「うわーそれついにじめじゃーん」

入ってきたのは相模南と遙ゆっこの三人だった。

材木座はそれをちらつと見るも

「うわっ！こっち向いた！」

またもこの調子、ここでなんだかんだと反論しても相手の思う壺である、故にこのような場合にとる行動は一つ、スマホを耳に当てるど「なに！それは真であるか？くそつ！それが世界の選択なのか・・・ああ、わかってる。あいつなりの考えだな。ラ・ヨダソウ・ステイアーナ」

会話しているように見せかけその場を離れようとするのだがバレである。

三人娘は失笑ともれる笑みを浮かべまたも材木座を嘲笑する
材木座は泣きそうになりながらそのまま屋上から立ち去ろうとしたが

「あんた情けないね」

ポニーテールの女子が給水塔の上から声をかける。

「男ならもつとバシッと言えないの？」

とその女子はそのまま給水塔から飛び降りると三人娘へ向き直る

「あんたらよつてたかつて恥ずかしくないの？あとうるさい」

「あ、川崎さん……」

相模が怯む

「あのさあここは本当は立ち入り禁止なの知つているよね？騒いだり揉め事起こしたら先生たちに気づかれて二度と入れなくなるの分かつてるよね？」

「……」

「もしかんたらのせいでここに入れなくなつたら分かつてているよね？」

「だつて……あいつキモいし……」

三人のだれかがボソッと呟くが

「はつ？なにか言つた？」

「な、なんでもない！い、いこ！」

川崎に一喝されると三人娘は屋上から出ていった。

「スマヌ、かたじけない……」

材木座は一礼する

「あんた団体はでかいのにほんと……まあいや、気を付けな」

そういうと川崎はまたも給水塔の方へ登るのだが、そこへ一瞬強風が吹き川崎のスカートがめくれる

「……見た？」

「い、いや？我はなんも見てない、黒いレースの下着など我は見てはおらぬ」

その言葉に少しムツとなる川崎

「アンタたちは本当に……」

川崎はため息を付くとそのまま給水塔へ昇つて行つた

「ありがとう！黒レースの人！」

「あんた殴るよ！」

材木座は叫ぶと川崎の怒鳴り声を背に自分も校舎の中へと入つて行つた。

「しかし以前どこかで会つたような？まあいか、黒いレースのエロ下着も見れたしな、エロゲならフラグであるな、グフ、グフフ」

と傍から見たら大変気持ちの悪い笑みを浮かベゲスなこと思う材
木座だつた。

しかしこの時ここで出会つた女子と後々厄介ごとに巻き込まれる
とは夢にも思つていなかつたのである。

第二話

時期は文化祭の準備期間に突入する、無論材木座は実行委員なんて面倒なものに立候補するわけもなく、クラスの催し物も陽キヤ達が中心になり喫茶店をやるらしいがそこは材木座、見事にハブられており大してやることもない状態、やはりぶらぶらとする毎日であった。

「まったく、八幡が実行委員になつているとは知らなんだ、奴がやる気を出すとか槍でも降らなければよいが、そして我は暇だ」

教室では陽キヤやその取り巻きを囲んで女子たちが喫茶店の打ち合わせという名のおしゃべり大会なので材木座は居場所がない状態であった。

そんな中、文化祭実行委員会がちょっと揉めているという噂を耳にした。

なんでも委員長より副委員長の雪ノ下雪乃の方が働いているとかなんとかという話だそうだ。

「ふむ、八幡のみならずあの氷の女王もいたのか、委員長も大変だのう、全くあやつらは揉め事が大好きなようだの、我にはその神経がわからん」

事情など全く知らないので材木座は気楽なもんである。

廊下を歩いているとこの間屋上で会つた相模ら三人が話しているのに遭遇した。

また何か言われるかもと思うやり過ごそうとさつと廊下の角に身を隠す。

「ねえー南、さすがに委員会行かないとやばいんじゃない?」

「えー大丈夫だよ、雪ノ下さんが全部やつてるし」

「でも南は委員長じゃん、やっぱり南だけでも委員会に顔出した方がいいと思うけど・・・」

「大丈夫だつてーほら早くいこ!」

あの時自分をコケにした三人娘である

「フム、やはりあれはこの間我をバカにしくさつた連中のようだな、察するにあの南という女子が委員長なのか?氷の女王は恐ろしいから

のう、行きたくなくなるのも分るワイ」

三人は若干揉めているようだつたが結局相模が折れる感じになつたようだ。

相模は足早にその場から去つていつた。

「心中お察ししますぞ、ま、我をバカにした罰だ、氷の女王にこつてり絞られるとよいわ」

そんなことをブツブツといいつつ購買に寄る

「くーちびる／＼ふ／＼んふ／＼ん、やはり久米田先生のかくしご」とは面白いのう、エンディングテーマに君は天然色をチョイスするあたりがすごく久米田作品っぽい、今期のアニメは绝望的だがこれが生き残つて助かつたわい」

と材木座は売店でパックのコーヒー牛乳と菓子パンを買うと屋上へと向かう、文化祭の準備期間中に早く帰ると両親から『あんた文化祭近いんじやなかつたつけ？準備とか手伝いはいいの？』

と余計なことを言われるので屋上でおやつをとりつつ時間を潰してから帰るのがここしばらくの日課となつていたのだ。

ただ今日は天候が悪く外に出るのは難しそうだつた為階段の踊り場で時間をつぶすことにしたのだ、腰を下ろそうとしてふと上方からすすり泣くような声が聞こえる事に気が付いた。

見上げると屋上の扉の前のところに誰かが座つている。

「委員会なんてもう行きたくない……もうウチいなくていいじゃん……雪ノ下さんだけでやつてればいいんだよ……」
相模が一人座つて泣いていた。

これはまずい、気づかれたら何を言われるかわからんぞと材木座はこつそりその場から立ち去ろうとしたがダメだつた。

「だれ！」

「ひ！」

相模が顔を上げこちらを睨みつけたので反射的に悲鳴を上げる、やはり面と向かつて睨まれると超怖い

「・・・なにしてんの」

「わ、わわわれは、な、なにも・・・そそそそつちこそ
「ウチは・・・別にいいじゃん！下行くからそこどいて！」

と相模は階段を降りてくるのだが足取りが若干ふらついているようだ、材木座は階段の端っこへと移動しようとする、しかし

「あっ！」

という声とともに目の前で相模が階段から足を踏み外した。

「いかん！」

材木座は菓子パンとコーヒー牛乳を投げ捨て相模に腕を伸ばすが当然というか相模は逃げるように体を捻る。

己の不細工さを呪い材木座は勢い余つて相模の下の方へ滑り込む形になる。

「グボハア！」

材木座は悲鳴とともにうつ伏せの状態で相模の下敷きに、そして菓子パンとコーヒー牛乳も材木座の下敷きとなってしまった。

保健室にて

「ごめんなさい」

制服が菓子パンとコーヒーでぐちゃぐちゃになつた材木座へ相模が頭を下げる。

「い、いや我は、だ、大丈夫であるが、その、お主こそ大丈夫であるか？」

さつきとは打つて変わつて殊勝な態度に材木座はたじたじであった。

相模は足をひねつて歩けなくなつてしまつたので材木座が肩を貸して連れてきたのだ。

始めは嫌がつていたが流石に一人では立てず不味いと思つたのか渉々材木座に連れてきて貰つていた。

保健室には養護教諭はいなかつたので勝手に湿布を取り出し相模は足に貼つていた。

「ウチは大丈夫・・・ほんとゴメン・・・」

「左様であるか、なに、札は不要！これから気を付けるのだぞ！では」

と材木座は立ち上がりろうとするが

「ほんとウチつてダメなんだ……文実の委員長に立候補したら何か変わるかなと思つたけど何やつてもダメ……」

相模が話しかけてくる

「い、いや、ま、まあ今日は運が悪かったということで」

と材木座は会話をぶつた切つて保健室の扉に向かおうとするのだがそれに構わず相模は話し続ける

「ウチも一生懸命やろうとしているのに全部雪ノ下さんがやつちやつて……みんなも委員長のウチより雪ノ下さんのいうことばかり聞いてさ……ホントウチ何やつてんだろ……」

材木座は思つた、あ、これめんどくさい奴じやね？

「もう委員会なんて行きたくない……教室にいてもなんか空氣微妙だし……遙もゆつこも手伝つてくれないし……同じクラスの委員の比企谷なんか妙に雪ノ下さんと仲いいし、なんのあいつ……」

誰もいない保健室に男女が二人つきり、しかも相模はそことこのかわいい部類に入る、普通ならドキドキのシチュエーションであるが、三次元の女に絶望し二次元に命をかけている材木座にとつてはただのめんどくさい事案でしかない。

「雪ノ下さんにはかなわないし、ウチも仕事出来ないし……本当にもう嫌……」

事実そろそろ家に帰つてNetfliixの新作の攻殻機動隊が見たいなあと思つていたり目の前の女子が新作の草薙素子にちよつと似てるなあと思つてゐる始末である。

時間をかなり潰せたので家に帰つても文句は言われまいと思うがどうにかここから脱出できないかと思い父親の愚痴を思い出す。

「フム、何故お主は雪ノ下殿に勝とうとしているのだ？その辺から間違つておらぬか？」

「何がよ！」

「ま、まあマテ……良いか？例えば普通会社のトップは社長であるな？」

「今そんな話をしていないでしょ！」

「ま、まあ落ち着いて、聞いてくださいらぬか？んでだな、世の中の社長全てが会社で一番仕事が出来て一番頭がいいと思うか？」

「何が言いたいわけ？」

「我的親父殿がよく愚痴つているのだが『会社はナンバー2で持つている』という言葉だ、社長は無能でもナンバー2が的確に社長フォロー、社内管理していれば問題なく回る、これが逆だとワンマン経営になつて破綻するということだ」

「無能つて酷くない？…それにそれだつたらナンバー2だけでいいじゃん！」

「まあ物のたとえだ、それとこれも親父殿がよく愚痴つているのだが『社長は社長業をやつていればいい』ということだ」

「…意味が分からんんだけど…」

「社長は最終的に全て責任を負う故、承認や決済をするのが仕事なんだそうだ、重要だつたり即決が必要な案件は最終判断が出来る社長が出る、下々のことまで口を出す必要はない、むしろそれだと現場が回らなくなるんだと」

「…自分で判断なんて出来ないよ…」

「だからその為のアドバイスをするのがナンバー2の役目であろう、文化祭とて同じ事、常に副委員長の雪ノ下殿を同席させて意見を求めるのだ、雪ノ下殿で知恵が足りなかつたら八幡を使え、奴は余計な知恵だけは回るからな、四の五の言つたら盟友である我が許可したと伝えれば泣いて喜ぶであろう！」

「…でもウチ、バカにした態度取つちやつてるし、そのせいか雪ノ下さんは言い方きついし、比企谷も何考えてるかわからないし…たぶん謝つても酷いこと言われそう…」

「安心めされい！我なんぞ自作の小説を常に持ち込んでいつも言葉の暴力で叩かれておる！でも文句は言つても奴らはきちんと読んで文句を言つてくるぞ！それが奴らの素である！だから全く気にする必要がない！」

「…そつかな」

「わだかまりがあるなら一言ごめんなさいとでも言つておけばよかる

う、奴らはそれでチャラにしてくれる、何、我なんぞ何時もやらかしてる故、土下座を超えて奴らの目の前で奉仕部の部室をなんど転がりまくつたかわからん」

相模はうつむいて黙り込んでしまった。

「ここでダメ押しである

「こんな名言がある、『本当にいいリーダーってのは後ろでどつし構えているもの、もしミスがあつても決して慌てず動することなく』』

「なにそれ？」

「その人はこうも言つていた『リーダーというものは距離置いて物事見ることが大事』ともな、雪ノ下殿とあんま仲が良くない貴女ならぴつたりであろう」

「・・・君つて失礼だよね、それにそれ誰の名言なの？」

「A R M S という漫画に出てくる通りすがりのサラリーマンのセリフよ！最後にこうも書いておつた『リーダーというものはね・・・他人をおだててこき使えばいいのさ！自分は安全な場所で！失敗してもあははと笑い！もし勝つたら目一杯いばりちらしてやるのさ！みんなの前で!!そんなものさ、他人から見たらね。』我の親父殿はこれ聞いたとき感銘を受けておつた、」

「漫画つて・・・君面白いね・・・そつか・・・委員会行つてみようかな・・・ところで君の名前なんだつけ？」

材木座はコートをバサッと翻すと

「聞いて驚け！刮目せよ！我是2年C組出席番号12番！剣豪将軍材木座義輝！この名をしつかりと心に刻むがよい！」

と材木座は口上を述べると自分で考えたかつこいいポーズを決め

る

「ウチは2年F組の相模南、つてか材木座君、制服汚れてるのにそんなポーズ決めてもしまらないよ？ごめんね、今拭くから・・・」

「これはしたり！心配ご無用！母上殿に洗濯させるのでな！では我はこれから戦場に赴かなくてはならない忙しい身の上！止めてくれるな！サラダバー！」

と材木座は颯爽と保健室を立ち去るのだつた。

第三話

材木座は啖呵を切つて保健室を出たのいいが、

「もう、忘れ物をしてしまつた・・・これも奴らの罠か・・・」
と無駄な独り言を言うと一旦教室に戻つてから帰ることになつてしまふ、途中ちよつと気になつたので会議室の近くまで行つてみることにした。

会議室の前には相模と雪ノ下、比企谷がいた。

「サボつててごめんなさい！ウチ足りない事ばかりだから何をしたらいいかわからないの、改めてウチのサポートお願ひします！」

どうやら相模は早速謝罪しているようだつた。

「それは大丈夫よ、それに私もサポートとという立場を超えていたと
いう自覚はあつたわ、こちらこそごめんなさい」

「謝るのは勝手だがなんで俺まで？」

「とある人から言われたんだけど雪ノ下さん以外に比企谷にも手伝わ
せるといつて、比企谷つて頭いいんだつて？その人すぐほめてた
よ、ウチに協力してくれないかな？君の力が必要なの、お願ひします」

深々と頭を下げる相模

「・・・いやいいけどよ、それ言つた奴だれよ？」

比企谷は照れているのか頭をぼりぼりをかいっている

「相模殿は早速『おだてる』コマンドを使つておるようだな？あやつは
女子には弱いからのう」

ニヤニヤしながら様子を伺う材木座

「盟友だつて、泣いて喜ぶつて言つてた」

と相模が言うと比企谷は呆れたように叫ぶ

「あの野郎！・・・」

それをすかさずニコニコとしながら雪ノ下が突つ込みを入れてく
る

「あら比企谷くん？人望があつてうらやましいわ」

「うるせえ、なんにも嬉しくねえよ」

といつもの言い合いが始まろうとしたところで相模が強引に割つ

て入る

「ごめんなさい、そういうのは後にしてもらえないか？早速今の細かいスケジュールとか決済の書類の整理がしたいから手伝いお願いします」

そう言うと比企谷も雪ノ下も顔を真っ赤にして相模の後ろを追うように黙つて会議室へ入つていった。

「フム、本当にやるとは恐れ入つた、しかし八幡は社畜の道を進んでいるようだのう、働いたら負け！これすなわち正義よ！おおつと我にもアニメを見るという仕事があつたな！急がねば！」

それから耳にする文化祭実行委員会はちょっと変わつたものになつた。

なんでも委員長は常に雪ノ下を従わせ、それはまるで社長と秘書のようだと、さらに背後にはやばい目つきのヒットマンを抱えており、従わないものや反抗する者には影で制裁を加えられるという話や、有志団体のOGが来て遅刻した人を肯定する発言をした時にはOGに迷惑だから出ていけと言つていたとか、その様相はまるで恐怖政治だとかいう話だ。

ただこれは一部のサボりたい連中が流している噂らしく眞面目に委員会に取り組んでいる者にとつてはいつまで何をどのくらいと具体的に明瞭な指示を出してくれるので評判はすぐぶるよかつた。
「人間変わるものだのう、まるでカリスマだな、カリスマ委員長？…：うーん委員長と言うとメガネにおさげであろう、あんな耳にピアスのリア充では断じてない」

そこからは文化祭が始まるまで材木座は相模の姿を見ることはなかつた。

次に彼女の姿を見たのは文化祭当日

生徒会長の挨拶が終わり委員長の挨拶の時だつた。
相模がマイクを持つとキーンとしたハウリング、それとともにどつと笑いが起きる、しかし相模はそれをものともせず

「えー失礼しました、音響にはあとでしつかり言つておきます、本日は

・・・」

何もなかつたように挨拶が開始された。

「はあー我だつたら緊張でぶつ倒れてるな、委員長ともなれば肝も図太くないと行かんのか」

オープニングセレモニーが終わると文化祭初日がスタートされる。

「ふん!・リア充共が」

一緒に回ろうと比企谷を誘つたのだが

「貴様のせいで余計な仕事が激増だ、絶対許さん」

と追い返されたので一人で回る羽目になつた、はずなのだが現在自分がクラスの催し物の呼び込みである。

妙な帽子と手作りの変な看板をぶら下げいわゆるサンドドイツチマンの形で客の呼び込みと宣伝である。
「材木座くん? つて暇つしよ、呼び込みやつといて、あと注文とかも手伝つてあげて、俺ら忙しくて無理なんだわ、青春の思い出作りにいっしょ?」

とクラスの陽キヤに仕事を押し付けられている状態なのだ。

「クソ! 打ち合わせの時は我をハブつてた癖に! しかも名前を疑問形で呼ぶとはどういうことだ?」

と半ばやる気もなく教室前をうろうろしている状態

「おなか痛くなつたといつて帰ろうかな」

と思つていたが中心になつっていた陽キヤ連中がクラスの大半の女子や取り巻きを連れていなくなつてゐるため回すのも大変な状態なのだ、一人抜けただけで結構な痛手だ。

「我も社畜の才能がありそうだな」

と外で呼び込み、客が入つたら注文取りとまあまあ忙しい。

窓の外ではキヤーといった歓声が聞こえる、文科系の部活が外で催し物をしているらしい

「いいなあ・・・我也見に行きたいなあ・・・」

「ごめんね材木座君、みんな遊びに行つちやつて・・・」

残されたのはクラスではあまり発言権のない底辺カーストの多少は眞面目にやろうと思つてゐる人しかない、実質的な準備の大半もこの人たちがやつた模様

「まー私はこ、ういう時ぐらいしか役に立たぬのでなあ」

「氣を取り直して呼び込みをしようと廊下に出ると

「ふーん、こ、材木座君のクラスだつて？つてかその恰好はなによ」

腕に『委員長』の腕章をつけた相模が立っていた。

「こ、これはこ、これは委員長殿、我らがクラスの喫茶店『自分探し』へようこそ」

「自分探しって…あんたのその恰好こそ自分見失つてんじやないのか？」

クリスマスで使われるようなとんがり帽子の先には風船、看板には『自分探し』の店名とその場の勢いで書いたポエムが書かれている。正直この格好は罰ゲームといつてもいい。

「致し方なかろう、青春といえば自分を探すだの、恋だの愛だの自由だの盗んだバイクで走り出して校舎のガラス窓割りまくつて支配からの卒業だのが大好きだからな！」

「そんな強く力説しなくとも…なんかあんたも比企谷みたいにひねくれてるね」

「ふむ、それは誉め言葉と受け取つておく、それで入るのか入らないのか？」

「入るよ」

「はーいおひとり様…つてあれおぬし前見た時二人ほど仲良さげな連れがいたであろう」

「これも見回りの仕事だから別行動なんだ、委員長つてほんとめんどくさい」

と嫌そうな表情になる相模、これ以上突つ込むと愚痴が始まらしそうだったので案内しそのまま注文を取る

「あれ？ 材木座君が注文を取るの？」

「ウム、喫茶自分探しの店員は現在ほとんどが行方不明でな、自分を探す前に店員を探さないといけない具合よ、なんなら我が客を呼び込み、我が注文を取つて我が食い物を提供することもあるな、まさにワンオペ」

「ちよつとそれつてどういうことよ…」

「我らに押し付けて行つた奴らが言うにはこれが『青春の思い出作り』なんだと、そのような理由で面倒なものは御免であるな、今ならミネラルウォーターがお勧めであるぞ」

「思い出作りつて……代表者は？」

「おらぬ」

「連絡先は？」

「しらぬ」

そこまで聞くと相模はおもむろに携帯を取り出すと
「もしもし？あんたの出番……はあ？いいから名簿から2—Cの代表者探して捕まえてクラスに連れてきて……今忙しい？……ん？そこに結衣がいるの？ちょっと変わつて……ゴメン結衣ちょっと協力して……」

なにやら電話をしている。

「しばらくウチ手伝うから、材木座君は外で呼び込みと案内だけやつといて」

と相模は喫茶店の手伝いを勝手に始めた。

材木座が外に立つてるとしばらくして比企谷と雪ノ下が2—Cの陽キヤたちを連れてきた。

「つたく由比ヶ浜の奴電話するだけ誰がどこにいるか分かるとか異常だろ」

「あなたと違つて顔が広いものね、ごめんなさいあなたの顔の皮膚は他の人より厚かつたわね」

「誰の面の皮が厚いつて？どの口が言つているのやら」

いつもの口論を交わし2—Cの目の前まで来る。

「はつ！おい雪ノ下、この喫茶店『自分探し』だつて」

「あら？本当ね、この人たちにとつて自分を探してもらえたから本望じやないかしら？」

二人はそう言うとぞろぞろと陽キヤ達を教室に押し込んで行き最後に雪ノ下と比企谷が入る。

教室の中からは

「すみません一時閉店にしますのでお客様は退店願いまーす、お

代は結構でーす」

と聞こえてお客様をしていたクラスメイトがぞろぞろ出てくる。

最後に相模が顔を出すと

「材木座君、すぐ終わるからちょっとまつててね」

そして教室の扉が閉まった。

しばらくクラスメイトと扉を見つめていると扉が開き相模が顔を出す

「終わつたよ、彼達は反省して文化祭中は言い出しつペの自分たちだけで回すつて言つてくれた」

後ろから雪ノ下と比企谷が出てくる。

「売り上げはきちんと全額学校側に寄付してくれるそうね」

「すげえよなあ今のご時世こんなにボランティア精神にあふれる連中がいるなんてなあ」

「途中で閉店もしないんだよね?『青春の思い出作り』楽しんでね?委員会できつちり監視するから」

二人の背後を見ると陽キャ達の顔が青ざめているのが見える

「さて比企谷くん、由比ヶ浜さんはどこかしら?」

「あーこつちだ」

「なんでも『はにとー』というものを一緒に食べたそうね?何故私を誘わなかつたのかしら?」

「俺に言うなよ・・・」

「あの一人は相変わらずのようだが中で一体なにが?」
「まー材木座君は知らない方がいいと思うよ?それにしても比企谷はほんとだよね、結衣のことどうすんだろ?」

「何気に怖いなおぬし、あと結衣つて由比ヶ浜殿のことか?なんかあつたのか?」
「ん?気にしなくていいよ、んじや材木座君いこうか?他のみんなも遊びに行つていいよ、お店は彼らが責任をもつてやつてくれるから、

15

「そうだよね？」

「は、はい！」

いつもイキリ倒している陽キャたちは借りてきた猫状態だ。

「んじやいこつか」

材木座は妙な帽子と思い付きポエムが書かれた看板を陽キャに渡すと相模と一緒に見回りという名目で文化祭を回ることになつたのである。

第四話

目の前の出来事が急展開すぎてただ流されるがままにしていた材木座は家に帰つて布団に入つた後ハツと気づく。

「アレ?なんか今日の我リア充だつたんじやね?」

文化祭で自分のクラスの店番、その後に女子と一緒に文化祭を回るとか何処の世界のリア充なんだろうか、しかも普通の女子ではなく委員長である。

本来なら一人で適当に回つた後さつさと帰つて家でアニメを見るかゲームをしていたはずだ。

「おかしい」

そう言つてスマホを取り出す、スマホには相模南のLINEが登録されている

一緒に回つた時にせつかくだからと強引に登録されたのだ。

「なんでだ?」

『仕事も兼ねてたからゆつくり回れなくてマジゴメン!明日も忙しくて一緒に回るのは多分無理、だからあの時のお礼はまた今度ね』
『本当になんだこれ?それにあの時つてなんだつけ?』

相模としては階段から落ちた時庇つてくれた時の話をしているつもりなのだろうが当の材木座はそんなことをすっかり忘れていた。
「我が三次元の女子とLINE?明日には隕石でも振つてくるのではないか?」

頭に疑問符を浮かべつつ材木座は次の日を迎えることにした。

文化祭二日目、今日は一般参加の日もある。

そのせいもあつて委員会の人たちは昨日以上に走り回つていた。
材木座は一人でふらふらと校内を歩く、2—Fの演劇は先日相模と見に行つており、一度見ればおなかいっぱいなので本日はスルーである。

歩いていると目の前に比企谷が見えた、カメラをぶら下げるので文化祭の様子を撮影しているようだ。

「ふうむ、八幡め寂しそうではないか、我も被写体探しを手伝つてやら

ぬとなあ

と近づくが隣に雪ノ下がいるのに気が付く

「クソー・リア充め！」

悪態をつくとその場を離れ、体育館でライブを見学したり各クラスの出し物をひやかしに行つたり、昨日見れなかつた文科系の部活の見世物を見に行つたりとそこそこ充実した一日を過ぐすことが出来た。あちこち回つて疲れてしまい、休憩をしたかつたのだが図書室は閉鎖されてるし体育館はうるさいし、自分の教室は先日のこともあるので休憩の為には入りにくい。

その為屋上へ来ていた。

せつかくだからと給水塔の所まで上り下を見下ろす

「フム、ここから見ると人がごみの様だ」

構内には沢山の人が見え、あちらこちらで何かのイベントをやってるようだつた。

「すこし昼寝をするか」

材木座はそのまま横になり昼寝することにした。

「・・・めてください！」

「・・・つつせーぞ！」

なにやら揉めている声で目が覚める、と同時にスマホに着信が来た。

横になりながら出ると相手は比企谷

『材木座、おまえ一人になりたい時どこにいる?』

『なんだ藪からステイツクに・・・』

と会話を続けるが下の方ではまだ誰かが騒いでいるようだ。

「てめえのせいで俺のダチが迷惑してるつて言うじゃねーかよ！」「クラスの出し物を投げっぱなしにするのがいけないんでしょ！」
「うつせーぞ！」

揉めている声が聞こえる、うるさいなと思いつつ比企谷との会話を続ける

『人を探しているが見つかん、あとは人目につかんような所ぐらいしかない』

「誰を探してるのだ？」

『文化祭実行委員長を探している、何処にもいないんだ！』
「なんと！」

材木座は上半身をおこして何気なく騒いでいる男女を見ると
「本当にやめてください！先生を呼びますよ！」

相模が他校の不良数名から絡まれていてる所が見えた。

「呼べばいいだろ！」

「キヤ！」

不良の一人が怒鳴り散らし相模にビンタをしたようだ、バシツという音とともに相模が屋上に転がる

「・・・屋上だ八幡・・・委員長殿はそこにある・・・至急援軍を頼む」
『屋上？どういうことだ？おまえ今どこにいるんだ！援軍つて！おい
！』

「ちと怖いがこれを見過ごすのは出来ぬよなあ」

材木座はスマホを懐に入れそのまま立ち上がった。

材木座は不良たちへ向き直ると大声で叫ぶ

「て、て天が呼ぶ、ち地が呼ぶ、ひひひ人が呼ぶ！悪を倒せと、俺を呼
ぶ！聞け！あああ悪人ども！わ、我は正義の戦士！仮面ライ
ダー・・・じゃなくて剣豪将軍材木座義輝!!」

大見得を切つたが足は恐怖でがくがくに震えている。

大声で某ライダーの決め台詞を叫ぶ材木座に不良達は気が付き振り向く

「はあ!? んだてめえ！」

「きききき貴様ら！い、委員長殿に狼藉を働くのを今すぐ止めるのだ
！」

「うるせえ！全部こいつが悪いんだよ！」

とヤンキーは倒れている相模の髪の毛を掴んで引き起こす

「いつたーい！！やめてよ！」

「や、止めぬか貴様ら！わ我が相手になる！委員長殿を離すのだ！」

「材木座君、だめだよ！」

「委員長殿！『に、人間は、負けるとわかつていても、戦わねばならな

い時がある。だから、たとえ負けても勝つても、男子は男子なり。勝負をもつて人物を評することなかれ。』お、お札にもなっている有名な人が残した我の好きな言葉でな、ももももつとも、そ、そこの暴力でしかじじ自分を表現できぬ、サ、サル共は知らぬだろうが！

「んだてめえ！降りてこい！」

「ぜ、ぜ是非もない！しばし待たれよ！」

材木座はそう言うと給水塔からはしごをゆっくり降りてくる、傍から見ると落ち着いているように見えるが実際は緊張で足に力が入らず手も汗でぬるぬるである。

「八幡、早く来てくれ……」

比企谷がくるまで時間稼ぎをしているつもりだったが、材木座の願いもむなしく煽られた不良達は当然激高し、降りてくる材木座の足を引っ張るとそのまま屋上の床に叩きつけた。

「ゲフウ」

床にたたきつけられるとそのまま不良に囲まれる

「誰がサルだつて？ああ？このブタが！」

不良たちは材木座に蹴りを入れ始める

「ひいい！」

材木座は悲鳴を上げて頭を抱えて丸くなる

「悪を倒すんだろ？おい！なんか言つてみろ！」

不良たちが材木座にさらなる攻撃を加える

「ちよつとやめなさいよ！」

相模が悲鳴を上げる

「委員長殿こそ早く逃げ……ぐはあ！」

材木座の腹に鋭い蹴りが入る

「逃げんじやねーぞ！」

「せつかく遊びに来たのに俺のダチはクラスから抜けられなくなつてるし！売り上げも山分けのはずが委員会に売り上げを管理されて全額学校に寄付することになつてるとか言つてるしょ！この女に後で責任とつてもらうからな！」

と不良が怒鳴り丸まつている材木座を囮んで蹴りを入れる。

痛みに耐えつつしばらくすると

「お前たち何やつてんの？」

聞き覚えのある声がする、材木座が顔を上げると比企谷が屋上の扉を少し開いて顔だけ出していた。

「なんだおまえ？」「こゝは立ち入り禁止だからとつとと帰れ？なあ？」

不良の一人が比企谷へと近づくとさらに声がする

「確かにこゝは立ち入り禁止だ！貴様ら何をやつている！」

バーンと扉が開かれるとそこには体育教師の厚木先生^{がいた。}

「お前ら他校の生徒か！どこの学校だ！」

「い、いや俺達は・・・」

「貴様ら！今更ごまかしても無駄だからな！ただでは済ません！こつちにこい！それとお前ら大丈夫か？話は後で聞く、鍵が壊れていたのは俺も知らなかつたしな」

厚木は材木座と相模を一瞥すると不良たちをどこかへ連れていった。

「助かつた・・・スマヌな八幡」

「俺の方こそ遅くなつてすまん」

「材木座君大丈夫？つて比企谷なんでそんなに手回しよかつたの？」

相模が材木座のところへ駆け寄る。

「こいつがスマホを通話のままスピーカーにしてたからな、俺は運よくうろついていた厚木にそのまま聞かせて屋上に連れてきたわけだ、しかし材木座よく耐えたな」

「貴様らに小説を見せる度に『耐える』のコマンドは鍛えられておるからな」

「なんだ、んじゃそんだけ耐えられるんだつたら小説はネットに晒せ、もう俺達の感想は必要ないな」

「我をハブらないでよ！はちえもーん」

「ふふふ、君たちつて本当に面白いね」

「面白いのはこいつの顔だけで・・・つて相模！早く戻らないとエンディングセレモニーがはじまつちまう、今雪ノ下と由比ヶ浜達が即興ライブで時間を稼いでるんだ」

「え！本当！材木座君ゴメン、ウチ急いで戻らないといけないから！」

「私は大丈夫だ！この場は任せて行くのだ！」

不良たちに蹴られたところが痛むのでそのまま横になりながらサムズアップをする材木座

「そのセリフ言いたかっただけだろうが」

比企谷は突つ込みを入れつつ扉の奥に相模と消えていった。

「フヒーなんだかとんでもないことになつたのう・・・」

仰向けになる材木座、しばらくぼーっと空を眺める、時刻はそろそろ夕方にさしかかろうとしていた。

ピロリンとLINEの着信音が聞こえる

相模から感謝のスタンプが届いていた。

「間に合つたようだの」

しばらくすると体育館から歓声が聞こえてくる、その歓声を聞きつつ材木座は思う

「やつぱりなんか青春してないか？おかしいなあ・・・現実はクソゲーのはずなのに・・・」

厚木が呼びに来るまで材木座はそのまま空を見上げているのだった。

第五話

文化祭終了後、材木座のクラスは大騒ぎになつていた。

クラスの陽キャたちは全員停学、他校の不良達も処罰を受けたらし
い。

被害者の相模は暴力に負けずエンディングセレモニーをきちんと
こなしたということで株が上がつていた。

しかし材木座のことは材木座自身が面倒になるのを恐れて関係者
に口止めを行つたので広まることはなかつたのである。

実際今回の事件の功労者ということで皆に紹介するから文化祭の
打ち上げに参加してと相模からお願ひされたが。

「我のような者が行つても疎外感を得るだけよ、いつかの時のように
『あの人だれー?』『キモーイ』とか言われてな」

そう言つて材木座は断り相模は以前屋上で初めて材木座に言つた
言葉を思い出して

「う・・・ゴメン・・・」

と言つて黙り込むしかなかつたのだ。

でも打ち上げにいかなくていいからせめてLINEで拡散すべき
と提案をするのだが。

「大体、大げさな口上を述べたくせに結局ボコボコにされただけだけ
ではないか、格好が悪い、恥ずかしい」

ということでの提案も却下

そこまで言われたので相模は諦めたようだが、それとは別に相模か
ら毎晩頻繁にLINEが来るようになつっていた。

ただその内容は友人間の愚痴やバイト先での愚痴ばかりである。
「委員長殿もリア充と思いきや苦労されている様だのう」

問題は女子の友達間でも話せないと見てているこつちも気が滅
入りそうな話題ばかりなどころ

「リア充もリア充なりに大変の様だ、やはりボツチが一番であるな!」

といいつつも漫画やラノベ片手にあちこちから名言を引用しては
律義に返信する材木座であつた。

文化祭が終わり結局屋上は閉鎖になつてしまつた

「一人飯をするところが減つてしまつたな」

あとは新館の辺りになるのだが……とパンとコーヒー牛乳を片手に目的地へとたどり着く

この辺は静かで誰も来ないのだ、ベンチはないが雑草が芝生のようになつており座るのにちょうどいい

「よし、誰もおらぬな」

材木座は木陰に腰を下ろすと

「ちよつといい？」

ふいに後ろから声をかけられびくつとなる、振り返るとどこかで見たポニーテールの女子

「え？・えええ！・い、いつたいどこから・・・はつ！まさか組織の！貴様何奴！」

狼狽する材木座

「何言つてんの？普通にそこの木の影だよ、あんたとは前屋上で会つたよね？・忘れた？」

「屋上・・・ああ！あの黒レースの！」

「あんた本当にぶつよ？」

と川崎は怖い顔で材木座を睨む

「ヒッヒー！・この度はご無礼申し訳ありませんでした！」

ビビつた材木座はその場で土下座

「ちよつとあんた！殴るつてのは冗談だから顔上げてよ・・・」

いきなり土下座されて狼狽する川崎

「冗談でしたか・・・」

と材木座はほつとして顔を上げる

「して何故こちらにいるのだ？」

「どつかのバカのせいだ屋上には入れなくなつたんですね」

今回は睨んでいなかつたのだが川崎の目つきが元々きつい為かまた睨まれたと思い更に土下座する材木座

「この度は誠に申し訳ございませんでした！」

「ちよつと！・あんたなんかやつたの？他校のバカのせいだつて聞いて

るんだけど? もうやめて、顔を上げてよ……」

と川崎は材木座の前にしゃがむがそれがいけなかつた。

「い、いやその件についてはだな……あ」

と顔を上げた先にはしゃがんだおかげでスカートがめぐりあがり丸出しになつた黒レースの下着

「成程、貴女はよほど黒のレースがお気に入りと見える」

下着を凝視しながらつい口に出す材木座だったが、川崎の顔が見る間に真っ赤に染まる、それに気が付いた材木座は狼狽し言い訳をするのだが

「は! いやちよつとタイム! 今のなし、我何にも見ておらぬ!」

「死ね!」

怒りと恥ずかしさで感情的になつた川崎は顔面に正拳付きを食らわせた。

余計な事言わなきやよかつた

薄れゆく意識の中、材木座はぼーっとそれだけを考えていた。

材木座は頭がとても柔らかいものに包まれてる感触で意識を取り戻す、懐かしいような感じがして気持ちがいい、しかもいいにおいがする

「これはもしや幼少の時の記憶か……あの頃は幸せであつた……」
とても気持ちがいいのでその感触をもつと得ようと体を反転させ柔らかいものに顔をうずめるのだが

「ちよつと……この変態! あんた! 起きてるんなうどいて!」

聞き覚えのある声とともに材木座の顔は地面に放り出される

「ぶべら!」

「ホントにもう信じらんない!」

「む? 我の記憶は? そしてここはどこ?」

目が覚めて狼狽する材木座、顔をあげると川崎がスカートの裾を抑えながら正座し顔を赤らめている。

「本当にあんたは……あんたが気絶してから10分もたつてないよ

その声で完全に目が覚めた

「一体先ほどの感触は……」

「いいから忘れて！」

「は、はあ」

材木座は何が起きているのかよくわからなかつたが一人静かに食事をとる雰囲気ではないということは理解できた。

「で、では我はこれで……」

と材木座はその場から立ち去ろうとしたが

「ちょっと待つて！」

「ひい！お、お金はありませぬ！」

「違うから、アンタに相談があるんだけど」「

「相談？ハテ？」

川崎は自分の隣に座るように言う

「ム、隣に？」

流石に女子の隣に座るのには抵抗がある

「何意識してんの？」

しかしあまたも睨まれたため材木座はしぶしぶと隣に座りパンをかじり始める

「して、相談とは？」

と材木座が聞くと

「あんた比企谷と仲良かつたよね？」

「うむ、奴とは盟友の間柄であるが……奴がどうした？」

「じ、じつは……」

と川崎は先ほどまでの威勢はどこへやら突然もじもじとし始める
「文化祭の最終日にあいつなんか急いでたみたいで、屋上の開け方を
教えてらあいつがあたしに愛してるつて……」

「んなもん冗談に決まつておる、我もたまに言われておるしな」

二次元ならバツチリフラグが立つのだがここは現実世界、現実はどうやろうとフラグなんか立たないクソゲーだと材木座は知っていた。
「多分そうだと思う、でもあいつは以前あたしにスカラシップのこと教えて助けてくれたし……」

スカラシップ？もしや以前の奉仕部の依頼の奴か？

なんかラーメン食つて帰つたら、次の日スカラシップのこと教えて

解決したと言われたことを思い出した。

ついでに名前も思い出した、確か川崎とか言つてたような気がする。

「あの日からあいつの事本当に意識しちゃって・・・もしかしてって思っちゃってさ」

「それで我にどうせいと」

「わかんない」

「は？」

「どうしよう、全然わかんない・・・」

川崎は両手で顔を抑えて頭を振っている

「・・・では我が折を見て八幡におぬしの事どう思つているか聞いておいてやろうか？」

「え？ちょっと！それは・・・恥ずかしい・・・」

「我もお主のこと依頼で知つてるわけだし何気なく聞くだけだから何も問題なかろう？」

「そりやそうかもだけど・・・」

材木座は残つたコーヒー牛乳を一気に飲むと

「この剣豪将軍に全て任せよ！」

とコートをバサッと翻しその場を立ち去ることにした。

第六話

「ぶつちやけめんどくさい」

何故かここ数日、最近比企谷に近づくタイミングがつかめず、なかなか話しかけられない、今更ながら大見得を切ったのを後悔している材木座である。

体育の時間は陽キャ連中が停学となつており変に人が固まる事も無くなつたため、組む人が増え、わざわざ比企谷と組む必要もない状態、奉仕部に行こうにも最近プロットすら思いつかない状態なので行く理由もないものである。

用もなく部室に行つて話をしようにも不審がられるか追い返されるは確実、そもそも材木座としては用もないのに雑談するために会いに行くと言うことが出来ないのでだんだんめんどくさくなつてきていたのだ。

「分りませんでしたーといつてまた土下座すれば許してくれるかのう・・・」

面倒になつて色々酷いことを考え始める材木座だった。

放課後、図書室にでも行こうかと校内をふらついていると相模との友達が向こう側から歩いているのに出会つた。

相模とは毎日LINEを交わしていたが、学校で実際に接触するのはどうかと思つていた為、すれ違いざまに材木座は軽く会釈をしてそのまま通り過ぎようとした。

「あーウチちょっと職員室に用事あるの忘れてた！」

「えー南、マジで？」

「ゴメン！文実の後始末がまだあつて！先帰つてて！」

すれ違いざま相模が友達にそう話しているのが聞こえる。

「もう文化祭も終わつて数日経つのに委員長殿は大変よのう」

と材木座は完全に他人事である、そのまま図書室へと向かう、しばらく歩いてると

「ちよつと！」

後ろから声がする、まあ自分でないだろうと無視して歩いていると

「ちよつと無視しないでよ!」

という声とともに相模が目の前に回り込んできた

「これはこれは委員長殿?職員室に用事があつたのでは?」

「それはいいの、それより材木座君に話があるんだけど」

「はあ」

「一体何用だといぶかしげな視線を送っていると

「あんたつて川崎さんと付き合つてるの?」

「は? 我の様なキモデブが現実の女子と付き合えるわけないであろう?三次元なんぞ我にとつてはもはやファンタジー、二次元こそが我にとつてのリアルであるな」

「意味が分かんないんだけど・・・そんなことより新館のあたりの木陰で川崎さんといちやついてたの見たつて人がいるんだけど? どういうこと?」

「見間違いでは?」

「だつて、川崎さんと並んでご飯食べてたとか・・・」

「ま、まあ確かに一緒に食べたが、そのぐらいはその辺のリア充なら日常茶飯事であろう」

「それだけじゃなくつて、その・・・川崎さんに膝枕してもらつたとか・・・」

「へ?」

「んでそのまま・・・その・・・ふとももに顔を擦りつけていたとか・・・」

「はあ?」

顔を赤らめて俯く相模に唖然とする材木座

「そんなどこする訳が・・・もしや!」

氣絶した時、頭に感じた柔らかい感触とその柔らかいものに顔をうずめた事を思い出す。

もしや氣絶した自分を介抱するために膝枕をしてくれていたのだろうか?

んで自分はそれに気が付かないで?

「・・・委員長殿、誤解だ」

「もう委員長じやないんだけど? んで本当なの?」

「本当だけど本当ではない」

「は？ どつち？」

「委員長・・・いや相模殿！ なにか怖い！ そしてなんか近い！」

相模が目を釣り上げて材木座に迫る、相模からはなんだかいにおいがするなあと余計な事を考える材木座

「んどつちなの？」

「良くわからぬのだ」

実際その時は意識が朦朧としていたので良くわからなかつたので嘘はついていない

「は？」

「良いか？ 事は大変複雑なのだよ、順を追つて話す必要がある」

「ふーん、んじや言い訳聞こうか？」

なんでこんなことになたのかと材木座はめんどくさいと思いつつ歩きながら説明をする

「・・・というわけで別に逢引していたわけでは無い、川崎殿も困つていた御様子なのだ」

「ふーん、なんだ別にいちやついてた訳じやないんだ」

座るところが見つからなかつたので自販機でジュースを買った後、中庭にベンチに腰をかけている。

「我がかのような女子といぢやつける訳なからう・・・」

「でも川崎さんの下着は見たんでしょ？ 一人つきりの時に！」

「何故怒る？ 大体三次元の下着なぞ見てもな・・・」

「君結構失礼だよ？」

二次元だつたらドット単位で確認するのだがと付け加えようとしたがドン引きされるのは確実だつたのでそこは言わなかつた、しかし相模がなぜか怒つてているのでなだめにかかる。

「そんなこと言われても・・・それに見られるのは普通に嫌であろう？ 例えは相模殿だつて我が見せろと言つたら即通報であろう？ 我はまだ捕まりたくない」

と材木座が言うと

「・・・もし・・・どうしてもつて・・・」

相模が突然赤くなりもじもじし始める

「今までのお礼もあるし……どうしてもつて……」

と相模はスカートの端を両手でキュッと握る

「え？」

態度が思っていたのと違うので狼狽する材木座

「そ、それより川崎殿の事だ、どうすればよいかのう？」

相模の様子がおかしいので強引に話題を変えることにした。

質問されていることに気が付きハツと我に返る相模

「え？ああそうだね、材木座君は比企谷の盟友なんでしょう？普通に聞けばいいじやん」

相模がいつもの様子に戻ったようなのでほつとする材木座

「それが最近そういうことを話す機会が無くてのう・・・メールやらLINEやらはやつの気まぐれで一方的に打ち切られるし、これを聞くために奉仕部に行くのも変だしな、雪ノ下殿と由比ヶ浜殿もいるし・・・」

「クラスも違うしね」

うんうんとうなずく相模

「まあ急ぐ物でもなし、そのうちチャンスはあるだろう」

「うーん話す機会か・・・」

相模はあごに手を当て考え始めた。

「相模殿？」

「・・・うん！今度は材木座君をウチが助ける番だね！ウチが話す機会作つてあげる！」

「は？」

「まー任せて！」

材木座が差し迫つた体育祭の実行委員長に相模が立候補したと
知つたのはその二日後であつた。

第七話

「ゴメン！」

例によつて新館近くの木陰にて材木座が昼食を取ろうとしたところ相模がやってきて頭を下げてきた。

「いかがいたした？ 藪からステイツクに」

突然の謝罪に戸惑う材木座

「実は文化祭の実績があるから体育祭も委員長にならないかつてオファーがあつて・・・」

理由を説明する相模、生徒会長から奉仕部に依頼があり、奉仕部から相模に実行委員長にならないかとオファーがあつたとのこと。

正直悩んでいたが先日承諾したことだつたが

「ほう、委員長に返り咲いたか、流石相模殿、してなぜ謝るのだ？」

「この間言つたじやん、比企谷と話す機会作つてあげるつて、文化祭みたく比企谷や雪ノ下さんにサポートをお願いして、材木座君にも有志つて形で参加してもらえれば比企谷と一緒にいられるでしょ？でも・・・」

と奉仕部へサポートをお願いしたところ

『文化祭実行委員会は相模さんの活躍でかなりスマートに進んだし、今回は一人でやつてみてはどうかしら？ 大丈夫よ、困つたら相談にきなさい』

と言われ、同席していた生徒会長からも相模さんだつたら大丈夫と言われてしまつたことだつた。

「あそこまで信頼されてたら頑張るとしか言えないじやん、計画が狂つちやつた・・・」

「良いではないか、我的ことは気に病むでない、頑張られよ」

「ありがとう・・・つて材木座君つて前から思つてたけどなんか妙に尊大じやない？」

「癖だ、ほつとくがよい」

「フフフ、んじやあね」

体育祭実行委員長となつた相模、ただ早速目玉競技の選定で詰まつ

てしまっていた。

その為奉仕部へ相談したところ比企谷の提案で海老名をアドバイザーに呼ぶことになつた。

「なんで海老名さん？」

「文化祭の演劇大盛況だつただろ、ああいう奇抜なアイディアを活用したい、適材適所といつたところか」

「ふーん、そういえば海老名さんつてオタクな趣味あるんだつけ？」

「オタク趣味をバカにするなよ？ああいうのは創作活動においてだな・・・」

と力説しようとすると比企谷だつたが相模に止められる

「わかつたから、力説しなくていいから、ほらそこの二人も呆れてるじゃん」

シラーとした目で比企谷を見る雪ノ下と由比ヶ浜

「えーあーゴホン、まあつまりオタクだからと言つてバカにするのはやめろと、そういうことだ」

「別にバカにしてるわけじゃ・・・あ！じゃあさウチが知つてる人呼んでもいいかな？」

「いいんじやね？つてかオタクの知り合いなんていいるのか？」

「まあね、んじや海老名さんは任せせるね？」

相模は早速LINEで材木座を呼び出す。

「という訳で日玉競技の提案をお願いしたいんだけど？」

「う・・・メンドクサイ・・・」

まさか本当に参加させるつもりだつたとはと畠然とする材木座
「いいじやん、採用されたらそのまま有志つてことで手伝つてもらう
から比企谷とも話す機会出来るよ」

「うーむ、そういうことか・・・最近八幡とともに話しておらぬし
なあ・・・」

「んじや決まりだね！でも期限は短いからウチも手伝うから！早速考
えよ！」

「あの、なんか近くないですか？」

相模がやけに近いので挙動不審になる材木座

「そつかなーそれよりほら、早く考えよ?」

と相模は余計にくつついでくる

「う、うむ・・・運動会といえ巴騎馬戦・・・」

と一緒に考える訳だが上手くまともらず、家に帰つてからもLINEでやり取りをする羽目になつてしまつた。

その後、海老名、材木座による目玉競技のプレゼン会が開始される。海老名は大将を設定した棒倒し、対して材木座はコスプレをして騎馬戦をする通称チバセン、プレゼンが終了し相模からねぎらいの言葉を受ける

「二人ともありがとう、あとはこの資料を元に検討してみるから」と相模に言われ廊下に出た二人

「えーっとザザ虫くん? つてさきさきや相模さんの仲いいの?」「え?」

「新館の人気の無いところで一緒にいたの見たよ?」

「ちよつとおぬし!」

「んー実は私もある辺たまに行くんだけど最近先客が多くてさ? 大丈夫、さきさきにセクハラしてたのは相模さん以外には言つてないから」と海老名は言うと手をひらひらさせて海老名は姿を消す

「つぐーあのエビが元凶か! 余計なことを吹き込みおつて!」

と嘆く材木座であつたが今更どうしようもない為諦めてそのまま家に帰るのだつた。

帰宅途中に相模からLINEが入る

『案は両方採用するつもりだけどちよつと揉めてる、でもウチ頑張るから! 体育祭一緒に頑張ろう!』

「うーむ、自分で言うのもなんだがいろいろめんどくさいしのう」と材木座は相模に無理せず頑張れと送つておく

『今度は一人で頑張るつもりだから! 応援ヨロシク!』

無駄に明るい感じのメッセージである

この日これ以上相模からのLINEはめずらしくこなかつた。

「まあ流石にやばくなつたら八幡達の所に行くだろう」と材木座はそのメツセージを軽く捕えていたのだがそれが良くなかった。

次の日

「さがみん顔色悪いよ」

教室で由比ヶ浜が相模に話しかける

「う、うんちよつと委員会で疲れてて・・・」

「無理しないで困つたら相談してね」

「ありがとう、そうさせてもらうね」

ニコッと笑う相模を見て安心したのか由比ヶ浜は自分の席に戻るしかし由比ヶ浜の後ろ姿を見て相模はつぶやく

「こんなのは相談できないよ・・・」

その日の昼、材木座は屋上へ向かっていた。

新館付近は海老名が出没する可能性があるということが分かつたためである

閉鎖されてるせいもあって屋上方面には完全に誰も来ない状態になつてているからだ。

「屋上に出れずとも階段の踊り場で食すればよいのでな」

とまたも購買で買ったパンとコーヒー牛乳を手に腰を下ろすとすり泣く声が聞こえる、そして周りを見渡すとまたも扉付近にだれかが座つているのが見えた、よく見ると相模であつた。

「もしかして友人とトラブルにでも? いやもしや男に振られたとかなのか? ここは一時離脱した方が・・・」

と腰を上げるが

「あ・・・」

相模が気づいてこちらと目が合う、さすがにこの状態で無視はできない

「委員長殿どうされた?」

と相模の方へ近づきながら聞くが

「ジ、ゴメン・・・ウチの問題だから・・・」

目をそらして俯く相模

「うーむ成程！察するに恋愛的な物であるか？彼氏がどうこうとか？そういうことなら全くアドバイス出来ぬな、スマヌ」と材木座は立ち去ろうとする

「違う！ウチ彼氏いないし……ってそういうやなくって！」

突然大きい声で怒鳴られたのでびくつとする材木座

「ヒツ！い、いやスマヌ、てつきりいるのかと……ってそれなら一体？」

「……本当にゴメン……迷惑かけたくないし……」

またも黙り込む相模に材木座はまたも思いついたセリフを言う

「私は無能だが卑怯者ではない」

「は？」

「某吸血鬼漫画に出てくる大英帝国の将軍が最後に言ったセリフよ、我も無能であるが知り合いが困っているのを知つて立ち去るのは卑怯者ではないか？もつともこれが八幡だつた場合にはその限りではないがな！」

「……比企谷の扱いぞんざいじゃない？」

「ふん、奴がマジ泣きしてるところなんぞ見たくはないわ、泣いたふりして繋り付くことはよくあるがな！」

「それ結構卑怯だとと思うけど……本当に君たちは面白いね……」

相模は少し元気を取り戻したようだ。

「でも……大丈夫、ウチが悪いんだから……」

と言い淀む相模に材木座は一喝

「嫌だ！そんな頼み事は聞けないね！」

それを聞くと相模は目を丸くする

「あ……いや……これもその将軍が最後に言つた言葉でな……一度言つて見たかったのだ、スマヌ」

と材木座は頭を下げる

「う……うううん……怒つてない、ちょっと驚いただけ……」

その言葉ほつとする材木座

「……おぬし、いつもLINEで我に愚痴を並べ立ててるではないか、

この件もどの道後から愚痴を送つてくるのであろう？返信するときの名言を探すのもなかなかめんどくさい、今話していただけだと大変助かる

「理由が君らしいといふか……そういうことなら仕方ないね、うん、実はね……」

ようやく重い口を開く相模、その話す内容は委員会のことだつた。プレゼンの後多数決を取つたら同数であり、ならば両方やってみようと提案したところ運動部勢に反発されたという、しかも自分は友達だと思っていた二人の女子が中心になつて反発しているということだつた。

「ウチ、友達だと思つてたのに……それに材木座君の事も悪く言われて、つい感情的になつちやつて……」

相模が感情的になつて怒鳴つてしまつた為、委員会はかなりむちやくちやな状態になつてしまつたとのこと

「ウチじややつぱ無理なのかな……結局ウチ誰かに頼らないと何にもできないし……」

落ち込む相模に材木座が一喝する

「よいか相模殿！貴女にいい言葉を教えてやる！人の足を止めるのは絶望ではなく『諦観』、人の足を進めるのは希望ではなく『意志』だと！」

「それもまた漫画の名言つてやつ？で諦観つて？」

「左様、また漫画だ、我はこれぐらいしか知らぬからな、んで諦観とは悟つて諦めることだそうだ、漫画では『あきらめ』とルビがふつておつた」

「そつか……でも諦めず頑張ろうと思つていても……遙にもゆつこにも裏切られて……ウチ、力が欲しい……」

「フム……今力が欲しいといつたな？」

「……うん」

「力が欲しいか！ならばくれてやる！しばし待たれよ！」

と材木座は叫ぶと奉仕部へと向かう

「たのもう！」

とノックもせず扉を開ける、中では雪ノ下と由比ヶ浜が一緒に食事をしていた。

「うわっ！びっくりした。中二？どうしたの？」

「ぞ、財津君、ノックをしなさい」

「八幡は何処だあ！！！」

「ひえええ呼ぶ！今呼ぶから～」

と驚いた由比ヶ浜は比企谷へ連絡する、しばらくするとだるそうな足取りで比企谷がやつてきた。

「なんだ材木座、ラノベの感想は放課後にしてやるから昼に呼び出だなよ、大体昼休みなんだから休ませろ」

といつもの調子の比企谷に食つてかかる材木座

「違うわ！目玉競技の為に我が徹夜して考案したチバセンがぼしやるそうではないか！あのエビが考えた棒倒しも無くなるそうだぞ！貴様一体どういうことだ？」

「え？俺何も聞いてないんだが？」

「ちよつとその話詳しく聞かせてくれないかしら？」

「さがみん大丈夫って言つてたけどやつぱりなんかあつたんだ・・・」

「八幡！委員長殿を立候補させておいてフオロー無しとは無責任にもほどがある！」

いつもと違う剣幕に比企谷は唖然として見ているだけだ、それを見かねて雪ノ下が代わりに返答をする

「財津君？それは心外ね、私たちは困った時には相談に来てといつたわ、現に目玉競技の提案に・・・」

と雪ノ下が言うが材木座はこれに猛反発

「ちつがーう！その後のフオローだ！相模殿は今、孤軍奮闘孤立無援四面楚歌僑軍孤進状態なのだぞ！！！」

その返答に雪ノ下は表情を変える

「!!その話詳しく聞かせなさい！あと由比ヶ浜さん？相模さんと城廻先輩を呼んで！今すぐ！」

「・・・相模殿は我が呼んでくる、待たれよ」

そう言うと材木座は相模の所にダッシュで戻る

「奉仕部の協力を取り付ける！急いで来るのだ！」

「そんな…また雪ノ下さん達に頼るなんて…ウチが悪いのに…」

とうつむく相模に材木座はまたも一喝

「よいか相模殿！以前ARM'Sのリーダーに関する名言を教えたはすだ！あの名言は実は一番大事あるものを持つていないと締めくくれらておる」

「大事なものって？」

「それは『信頼』である！既に相模殿は生徒会長殿や八幡達の信頼を勝ち取つておる！故に奴らをバンバンこき使つても文句は言われん！奴らの力はおぬしの力、おぬしの力はおぬしの力だ！」

「あははは、何言つてるかわかんないよ…」

「四の五の言わず来るのだ！」

相模の手を握るとぐつと引っ張る材木座、そのまま奉仕部へ

「連れてきたぞ！」

とまたノックもせずに部室へ入る

「え？中…、なんできがみんの手を握つてるの…？」

由比ヶ浜は畠然としている

「え？材木座？マジで？」

比企谷も驚いている

「い、いやこれは…ええい！今はそんなことはどうでも良かろう！」
と材木座は相模の手をぱっと離すとそのまま相模を部室の中央へ押し出す。

「我もいた方がよいか？」

相模は首を振る

「大丈夫、ありがとう」

「相模殿、幸運を祈る」

材木座はビシツとサムズアップするとそのままコートを翻し立ち去るのだつた。

第八話

その後の体育祭実行委員会は奉仕部の介入により強引ながらも反対派の運動部勢を抑えることに成功する。

そして当初の計画通り材木座も有志という形で実行委員会に参加することとなつた。

奉仕部も委員会の手伝いで右往左往することとなる。

そして今材木座と比企谷は入場門の製作にとりかかっている所だ。ようやく話す機会が出来たと材木座は早速川崎の件について聞いてみることにした。

「なあ八幡よ、最近ゆつくり話す機会が無くて我は寂しかったぞ？」
「俺は寂しくない、むしろ今うざつたくて仕方ないまである

釘打ちしくじつたらお前のせいだからな？」

ベニヤと角材を釘で打ち付ける比企谷、材木座は抑える係だ

「なあ、なんか逆じやないか？お前が打つて俺が抑えたほうが良くな？」

「我的指は文学を紡ぐもので力仕事の為ではないのだよ」

「文学……？ちよつと何を言つているのかわかりませんね。だいたいどう見てもお前はグリズリーにしか見えん、今なんて俺がグリズリーを調教しているように見られるまである、だからお前が釘打ちしろ、意外と力いるんだぞこれ」

「そう言うなよはちえもーん、作業しながらボーカルトークでもしようぜ？貴殿気になつてる女子いたりするう？」

「……なんだおまえ？なんか悪いもんでも食つたか？」

こんな話材木座は全くしないので怪訝な顔になる比企谷

「いや、我とて男だからのう……ほれ、以前おぬしの依頼の件で関わつた川崎殿なんてちよつと怖いけど美人だしスタイルはいいし何か工口イし……よくね？なんかよくね？」

「川……崎……？」

と首をひねる比企谷にこいつ以前色々やつた上に冗談とはいえ愛してるまで言つて名前も覚えてないのかと呆れる材木座

「ほらー・貴殿がスカラシップ教えて解決したっていう、川崎殿の弟君が依頼して来たっていう・・・」

と説明するが

「思い出した！川崎大志の野郎！あいつ小町にちょっとかいかけてないだろうな？思い出しだけでもイライラして來た、ちょっと小町に確認するから待つてろ」

と全く違うことを思い出す比企谷である。

「いやそりゃなくてだな・・・こりや駄目だな・・・」

目の前で必死に妹にLINEを送る比企谷を見て呆れる材木座だつた。

しばらくすると相模からLINEが入つてくる

『そつちはどう？』

材木座は全く脈なしな旨を伝えると

『そつか、んじや川崎さんにはウチからうまく伝えておくよ』

と返信が来る。

「あれ？ いつの間にそんな仲に？」

疑問に思つたので聞いてみると

『え？ だつてほつとくと川崎さんにセクハラするんでしょ？ だめだよ？』

「んもう、だからあれは・・・」

となんと返信しようか考えてると

『冗談、ウチも材木座君に協力してるって話しといたから』

と送つて来了。

更に

『まあ女子のことは女子に任せて！』

とのこと

「確かにこんななんどんな面して言つたらいいかわからん、女子に任せた方が得策であるな」

と思い任せる旨を返信する、しばらくして相模が走つてきた。

「ちよつと材木座君借りるね！」

と相模は比企谷に言うと材木座を廊下の陰まで引っ張つていく

「大変！川崎さん自分で確かめるつて！比企谷に告白するつて！」

「ええー明らかに悪い未来しか見えんのだが……」

「どうしよう……」

と相模と材木座が頭を抱えると

「なんだお前ら、こんなところに隠れて何やつてんだ？」

比企谷が探しに来た。

「あ、ちょっと目玉競技のことについて材木座君とね？」

と相模は「まかそようとすると

「なんだ知つてたのか、実は雪ノ下からチバセンに使う衣装の製作をどうしようかつて連絡が来てな、その件だろ？」

どうやら勘違いしてくれたらしい

「それでだな、文化祭の時衣装づくりしてくれたあいつ、ほら、川なんとかつて奴いただろ、あいつに頼もうと思うんだがどうだ？」

それを聞くとポンと手を打つ相模

「・・・そつか、そうだね、川崎さんが適任かもね」

「え？相模殿？」

「でも悪いけどウチ忙しいから比企谷が頼んでくんない？」

「あ？ああ、別にいいけどよ・・・由比ヶ浜のほうがいいんじゃないか？」

？

「ダメ、比企谷が言い出しつべなんだから比企谷でお願い」

相模の圧力にしぶしぶ承諾すると入場門の製作に戻る比企谷

「相模殿？どうされるおつもりで？」

「明日、比企谷が川崎さんにお願いするタイミングで告白させる」

「ちよつと性急すぎであろう？こういうのはこう、フラグ管理をしつかりとしてだな？そもそも心の準備とか・・・」

「フラグがなにかは知らないけど、こういうのつてズルズリいやつてもいいことないよ」

早速川崎に連絡する相模、電話口で揉めていたが説得に成功した模様、それを聞き不安に駆られながらも次の日を迎える材木座であった。

次の日の放課後、川崎を新館近くに待機させ比企谷に川崎はその辺

にいるらしいとの情報を流し二人つきりにさせることにした。

それを離れたところから木に隠れつつ観察する材木座と相模

「なあ、我いる必要あるの？」

「し！元々材木座君が請け負ったんでしょ？最後まで見届けないと」

比企谷は手を合わせて委員会への協力をお願ひしているようだ。

川崎は何か言つた後うなずいている

「フム、委員会への協力は取り付けたようだが、ここからか」

川崎は帰ろうとする比企谷を呼び止めている、そこから何か話しているようだがしばらくすると比企谷が頭を下げ川崎が俯きがちに離れていく。

「ウチちょっと行つてくる」

ぱつと駆け出す相模

「あ、置いていかないで……」

と材木座も立ち上がりつたが

「お前ら何やつてんの？」

比企谷に見つかってしまった。

「のぞき見とは悪趣味だな」

一人残された材木座は比企谷から睨まれる

「ち、違うのだ……」

慌てる材木座

「そういうや昨日あいつのことをどう思つてるとか聞いてたよおまえ？」

睨みながら比企谷が近づいてくる、材木座はこれまでだと思い本当のことを話すこととした。

「おまえ……余計な事を……おかげであいつに嫌な気持ちにさせちゃつたじやねえか」

説明を聞いて頭を抱える比企谷

「罪悪感を抱くぐらいなら付き合つてしまえばよかつたであろう」

「……出来るわけねえだろ……」

「八幡よ、良い言葉を教えてやろう『人生には必ず一度は“明日”を迎えるために踏み止まらなければならない』昨日、がある』だ、川崎殿

は明日を迎える為玉碎覚悟で告白をしたのだ

「……」

「我のような者に相談するほどあの女子は悩んでおつたのだ、気持ちを汲んでやつてくれぬか」

「俺にどうしようと……」

「これまでと同様、普通に接してくれればよいのでは？委員会の手伝いもしてくれるのであろう？何かあれば相模殿がフォローする」

「相模つて・・・つてそういうやさつき相模もいたな、あいつも絡んでいたのかよ」

「左様、その辺はあまり突っ込むな、さて仕事の時間であるな！私は早速川崎殿と衣装の打ち合わせをしてくる故、入場門は貴様一人でやるのだな！納期は待ってくれぬぞ！」

そう言うとダッシュでその場を離れる材木座

「あ！汚ねえぞ！」

それを追いかける比企谷

「まずは一件落着？か？」

と走りながら思う材木座、そしてそのまま衣装の製作と打ち合わせの為に借りた空き教室に来るとそこには抱き合う相模と川崎がいた。二人とも立つたまま無言で抱き合っている。

これがリアル百合か、美女が抱き合ってる姿は絵になるなどか三次元も中々尊いものだとぼーっと見ていると、川崎のすすり泣く声が聞こえる、振られた川崎を相模が慰めているように見えた。

相模がこちらをチラツとみると目で部屋を出るよう指図してくる

「ちよつと右腕がうずくので……」

と空気を読んで廊下に逃げ出す材木座。

「フヒー、これでは仕事どころでは無いのう」

しばらく待つていると相模が呼びに来たので衣装の打ち合わせを開始する。

そこにはいつも通りの川崎がいた。

「フム、川崎殿は明日を迎えたようだのう」

と材木座は満足そうにうなづくのだった。

それを見て相模と川崎はこいつ何言つてるんだといつた顔をして
いたが、その辺は全く気にせず打ち合わせを進める材木座であつた。

第九話

迎える体育祭、目玉競技もどうにか上手くいき比企谷の大活躍？もあつて体育祭は無事？終了する。

勝敗は白組の勝利、最終的に棒倒しは赤組が勝つたのだが両軍共に反則行為者続出したことで勝負はノーゲームになつたからだ。

「んもう！八幡のせいだ！反則負けとは！」

「いや材木座君も関わつてたでしょ・・・あんなバレバレなことやつて気が付かないと思つてはいるあたり比企谷らしいね」

「ごまかせたと思つたのに・・・」

「無理無理、それよりあの演説はなに？呆れるを通り越して恥ずかしかつたんだけど・・・」

相模が言うのは棒倒し前の材木座の演説、リア充に対する恨みと憎しみをぶつけた演説の事である

「別におぬしが恥ずかしがる必要は無かるう？それとも『諸君！私は運動会が好きだ！この地上で行われるありとあらゆる運動会が大好きだ！』というどつかの少佐みたいな演説にすれば良かつたか？」

「少佐がなにかしらないけどあれはちょっと卑屈すぎるというか・・・言つて恥ずかしくないかなと心配になつちやつて」

苦笑いする相模

「リア充死すべし！おかげで赤組に士気は天元突破しておつただろう・・・でも言われてみるとおぬしの言うように今更恥ずかしくなつてきたんだが・・・我どうしたらいいと思う？なんか隠れるところない？」

急に体を縮こませる材木座に相模はため息を付く

「後悔するなら言わなきやいいのに・・・」

「だつて八幡が・・・それにその場のノリとかそういうのとか・・・と相模の横でどんどん体が小さくなる材木座に相模が一喝

「んもう！ほらもつとしゃきつとして！棒倒しの時見てたけど敵に一人で突つ込んでいく材木座君はかつこよかつたよ？」

と材木座の背中をたたく

「ほんとに？」

「本当！それに運動部が数人がかりで来てたのに全員押し返してた
じゃん！おぬしただのデブじやないな？」

ちよつとおどけて材木座の腹をつつく相模

「グツフツツ、何しろ我は選ばれし者！剣豪将軍の生まれ変わりだか
らのう！もつとほめても良いのだぞ？」

おだてられていい気になり腕組みをして高笑いをする材木座

「そうそう！それでこそ材木座君！」

そして相模はぼそつと最後に付け加える

「……そうやつていつも堂々と胸張つてればかつこいいのに……」

「あ？小さくて聞き取れなかつたが何か言つたかおぬし？」

と聞き返す材木座だつたが相模は返答代わりに腹をビシつと人差
し指でつつつく

「んもう秘孔でも突くつもりか？……それより棒倒しは反則した者が
多数いるとか言つておつたがそんなにいたかのう？我が見た限りで
は見受けられなかつたのだが？」

「……いたよ沢山、ウチがいうんだから間違いない、材木座君も友達
が悪く言われるのは嫌でしょ？」

「もしやおぬし……職権乱用では？あと腹に指をめり込ませるな、
ちよつと痛い」

つつつくのに飽きたのが相模は材木座の太つた腹に指をめり込ませ
る

「下らないことを気にして罰だよ、それにしてもすごいね
どんどん指が入つていく」

「ちよつと痛い、そしてくすぐつたい！あふうん……」

「ごめごめん、冗談だつて」

「お嫁に行けなくなつたらどうしてくれるので」

呆れる材木座とそれを見てアハハと笑う相模であつた。

「それより体育祭終わつたら、この間階段から落ちた時に助けてくれ
たお礼をさせてよ」

「今更であろう、それにお礼と言われても……飯をおごつてくれるると

か？」

「別にいいじゃん、ウチがしたいんだし？材木座君がいいと思うことなら何でもいいよ？」

ニコツと笑う相模に材木座はたじたじとなる、そもそも材木座は背が高いため、必然的に相模は上目遣いになるのだ、照れ臭いのか少し顔を赤らめてる相模をみて三次元も悪くないとちよつと思つてしまふ。

「それ、あたしも混せてもらつていい？」

後ろから唐突に話しかけられビクツとする二人

「うわつびつくりした・・・つて川崎さん？」

後ろには川崎が立つていた。

「あんたらがいやいやしてたから話しかけにくかつたんだよ」「いやいやいやって・・・」

と顔を真つ赤にする相模をほつといて腕組みをして材木座に向き直る川崎

「けじめつけさせてもらつたお礼させてよ」

と晴れやかな笑顔を浮かべる川崎、因みにチバセンの際は何故かかたき討ちかのように雪ノ下と由比ヶ浜を執拗に追いまわしていたのであつた

「・・・こつちもお礼か、私は特に何もしていないのだが」

「あんたが比企谷に聞いてくれなかつたらあたしも告白なんて出来なかつた。そのままズルズル思いを引きずつていたと思うよ？だからお礼させてよ」

「ウームちょっとと考えさせてくれぬか」

腕組みをして考える材木座の後ろでは相模と川崎が笑顔で並んでついていくのだつた。

夕食時のこと、うーんどうなつている材木座に母親が話しかける

「義輝？・どうしたの？・悩み事？」

「うむ、実は色々あつて知り合つた人がだな、恩義を感じているとかでお礼をしてくれるそうなのだ、なんでもいいとか言つているのだが何

にしたらよいかと、同学年だしあまり高価なものをお要求しても……

「え？ 知り合いつて友達？ 男？ 女？」

「一人いるのだが両方とも女子だな、片方とはLINEで毎晩やり取りしてるが知り合い以上友達……」

と説明している最中に母親が騒ぎだす

「ちよつとあなた！ 義輝に女の子が！ しかも二人つて！」

「おい！ 義輝！ その話本当か!? それは現実の女なんだろな？」

「失敬な、別なクラスではあるが両方とも現実にあるわい、片方はちよつとガラ悪くてもう片方は委員長をやつていてな……」

「マジか！ ヤンキーと委員長なんてなんという王道！ どうどうお前にも春が……」

「あらー何か菓子折りもつて挨拶にいかないといけないかしら？」

まるで話を聞かない両親である

「ちよつと二人とも大げさすぎる！ 大体そういう関係ではないと言っている、ちよつとアドバイスただけで大したことはしておらんし」「うーむ、でもお前のアドバイスでその二人は恩義を感じるまでになつたんだろう？ おまえ相当凄いな、流石俺の息子だ。しかし確かに悩むよな……うん、そういうえば今日客からこんなものを貰つた、これを有効に活用するとよい」

と池袋のある施設の無料チケットを押し付けてくる

「3枚ある、本来は家族で行く予定だつたんだが仕方ない、お前に譲ろう」

しかし材木座は押し付けられたチケットを見てちよつと困った顔

「いやこれ女子にとつてどうなん？」

「母さんも好きだから大丈夫だろ」

「確かにそうだけど……いやそうではなくて一緒に出かけるとかじやなくてお礼をしたいと言つておるのだが……」

「お礼？ んなのついでに一緒に食事にでもいけばいいだろう、池袋なんて食うどこ沢山あるだろ？」

何故かその辺は適当である。

「ほら……焼肉食い放題のあそことか！」

と適当な事をいい始める、さすが自分の父親だと呆れる材木座
「いくらなんでも女子を焼肉食い放題に連れて行くのはNGというの
は我にも分るわい、他にと言われても池袋なんてラーメン屋ぐらいし
か知らんのだが」

「あら？ 最近ラーメン女子とかで女の子でもラーメン屋に行ったりす
るみたいよ？ ドラマにもなつていたし、それにこの間義輝の学校の女
の先生がラーメン屋に入つていくのを見たわ」

「もしや長髪の？」

「ええ、お一人だつたけどさすがにあの年齢になると彼氏といくのは
恥ずかいのかしら……全然そんなことないのにねえ」

と何もしらない材木座の母親は残念そうに言うが

「彼氏……いたらよかつたのに……」

真実を知っている材木座はもつと残念そうな表情になるのであつ
た。

第十話

次の日の放課後、新館近くに相模と川崎に呼び出される材木座「どうするか決めた？ウチたちは材木座君の判断に任せよ？」

人気の無い場所であり、立ち位置も材木座の向かいに少し離れて相模と川崎が並んで立つているのだ。

知らない人から見たらどつちに告白するとか彼女にするかとかそういうように見えるレベルである。

「何を？」

「お礼の話なんだけど？」

「う、うむそれか・・・実は池袋に美味いラーメン屋があつてだな、そこでラーメンをおごつてもらうかと」

その答えにちょっと残念そうな表情をする相模だったが

「そつか、ウチはいいよ？川崎さんはどう？」

と隣にいた川崎も誘う

「あんた達がそれでいいならいいよ」

川崎もそれならと頷く

「左様か、後だな、親父殿からとある施設の無料チケットを三枚もらつてだな、池袋を選んだのもそれが理由で・・・そのだな？我も我家族も結構好きなどこのなので変なところではない、嫌ならかまわんがせつかくなので一緒にいかがか？」

その言葉に目を輝かせる相模

「もしかしてサンシャイン水族館？ナンジャタウンとか？」

「いやその手のハイカラなものではない、当日のお楽しみということで、あと朝食は抜いておいていただけると助かる、何しろそのラーメン屋は人気店なのでな」

数日後、修学旅行も目前に控えた週末、ようやく三人の予定がついた三人は池袋駅に降り立つ。

材木座は駅から出るとそのままラーメン屋へと向かった。

「え？もういくの？」

「うむ、人気がありすぎるので早くいかんと並ばないといけなくての

う

東口から出ると南の方へ歩き、程なくして目当ての店にたどり着く
「無敵家……このラーメン屋？ つて材木座君が好きそうな名前だね」

「ウム！ 無敵にチートは我的夢！ 異世界に行きたい！」

「あなたは相変わらずだね」

ため息をつく川崎

「よいではないか、それに予想通りこれは好機！ まだ人はほとんど来ておらぬ！ いざゆかん！」

無敵家は開店直後の為か人は並んでおらず、すぐに店内に入れる状態のようだつた。

店に入り注文をする、出てきたラーメンを食べた二人は

「うわ！ 淫！」

「ちよつと味が濃すぎない？」

食感と味に驚く二人

「ほむん、これが良いのよ！」

と言ひながらズズズとラーメンをすする材木座

「材木座君つてラーメン似合うね……」

隣に座つた相模は材木座の喰いつぶりに半ば呆れ氣味である

「ちよつと食べきれないからウチの分食べてよ」

と相模は店員から小鉢をもらうとそこへ食べかけの麺や具を入れて材木座へ渡す

「へ？ でもこれ……」

さすがに躊躇する材木座、これでは間接キスのようなものである
「あんた体でかい癖に細かいこと気にしそぎ、あたしだつて弟に食べてもらうことあるよ？」

その様子を川崎はニヤニヤしながら眺めている

「そうそう、気にしすぎだつて！」

「い、いや……まあそつちがいいと言うなら……」

渋々小鉢に口をつけて中身を一気に飲むように食べる

「どう？ おいしい？ つて早！」

「味は変わらんであろう、それにラーメンは飲み物！ 喉で味わうのよ

！」

「あーもつと味わって食べてほしかったかなーでも材木座君が満足したならいいか」

と相模は若干残念そうである

「あんた落ち着いて食わないとそのうち死ぬよ?」

と川崎は呆れた表情である

約束通りおごつてもらう材木座

「うむ、人の金で食う飯は美味しいな！」

「結構な値段だよ・・・」

材木座はラーメン以外に丼物や餃子まで頼んでいたためかなりの金額だ

相模と川崎で折半したがそれでも痛い出費

「あんた食いすぎだよ、本当にそのうち死ぬよ?」

と川崎は呆れた表情

「美味しいもん食つて死ぬなら本望であろう！」

「ちょっとこれは考えないとね・・・」

「そうだね・・・」

満足げに宣言している材木座を見て二人は心配そうになりながらつぶやくのだった。

そんな二人を今度は西口に連れて行く

「ここが親父殿から授かりし無料チケットの場所！」

「なにこれ？」

「・・・？」

相模も川崎も唖然としている、看板には『池袋演芸場』と書いてある

「うむ、池袋演芸場であるな」

「・・・あたし、こんなところ初めて来たんだけど」

「ウチも、友達の話で遊びに行つたりデートした話聞いてもこんなところに行つたとか聞いたことなんだけど?これなんなの?」

「落語とか漫才とかが見れるのだ、我の両親も大好きなのだが・・・やっぱ嫌であるか?」

と予想以上にドン引きしている二人に焦る材木座

「う、うんまあ材木座君のご両親も好きならウチはまあいいかな?」

「そ、そうだね、何事も経験つていうし、意外と面白いのかも」

「よかつた・・・」

と恐る恐る中に入る一人を見てホツとする材木座であつた。

「なんか映画館みたいだね」

「日曜なのに人がほとんどいないんだけど・・・」

「それも演芸場の醍醐味よ、さあさあ座つて」

しばらくすると演目が開始される

「あ!あれテレビに出てくる芸人じゃない?」

「ほんとだ・・・」

「興奮するのは分かるのだがもうちょっと静かにだな・・・」

二人ともワイワイ騒ぐのでひな壇の芸人から客いじりが飛んでくる

「ほら!そこの色男!美人を侍らしちやつて!うらやましいねえ」

「え?我?」

「そうそうあなただよ」

自分がいじられるとは思つてなかつた材木座はあわあわとする

「ウチら美人だつて、川崎さん」

と照れる相模

「・・・」

赤くなり無言で俯く川崎である。

その後も演目は続くが、予想以上に面白いのか相模も川崎も肩をふるさせて笑いをこらえている

そしてたまに材木座に飛んでくる客いじりである。

客が少ない為3人並んでいるはとても目立つのだ。

出てくる芸人は毎度材木座をからかうのでその度に慌てる材木座と笑いをこらえるので大変な相模と川崎であった。

数時間が立ちそこそこの時間になつたので出ることにした。

「えーまだ見たいんだけど」

「これ面白い、今度大志や京華も連れてこようかな?」

二人とも大満足である

その後西武池袋の屋上へと二人を連れてくる

「へー、なんどころあつたんだ・・・」

「京華連れてきたら喜びそう・・・」

「知つておるか?ここは池袋の東側にあるが西武デパート、西にあるのが東武デパートとなつておる、ビッグカメラに入ると延々とCMソングが流れておるのだ『不思議な不思議な池袋』東は西武で西東武』つてな」

「へー詳しいね」

「ウム、ここ池袋は我にとつて特別に思い出があるところでな、幼少の時、両親と駅前のビックカメラは元より先ほどの演芸場に行つたり、サンシャイン60に行つたりな・・・あつち方面には親父殿ご用達のレコードショップがあるので・・・我にとつては特別な思い出がある場所よ・・・」

「・・・材木座君にもやつぱ特別な場所つてあるんだ・・・」

「酷いのう、普通あるのでは?川崎殿もあるのでは?」

「そうだね、京華とよく出かける公園とかは特別な場所かな?あと家族で行くところとか・・・」

と川崎は家族がらみで色々あるようだつた、しかし

「・・・ウチはないかな・・・」

と悲しそうな顔になる相模

「ま、まあ相模殿は我と違つてリア充だし?作ればよいではないか!大丈夫!多分できる!我が保証する!というわけでそこの商店で何か買つて来るがお主等はどうだ?」

「特別な場所・・・そうだね、できるといいな、あとウチはもういらな
いから」

「あのラーメンだけでおなか一杯、あんた食いすぎだつて」

と呆れ半分で椅子に座る二人

そこに聞き覚えのある声がする

「あれー?相模さん?さきさき?あとざ、ザザ虫くん?だつけ」

振り返ると大量の紙袋を抱えた海老名が立つていた。

第十一話

「三人で何やつてるの？」

「あ、いや、これは・・・」

回答につまりあたふたとする材木座の代わりに相模が答える
「材木座君には色々手伝つてもらつたからお礼としてご飯をおごつて
あげたの、その帰りなんだ、海老名さんはどうしたの？」

「私はお気に入りのお店でお宝を発掘してたんだ、その帰りにちょっと
と寄つてみたんだけねー」

と二コニコしながら紙袋を見せる海老名だが、材木座は気が付いた。

ここ池袋は目の前の女子向けの店が沢山あるということに、そして
当然その紙袋の中身はどんな代物が盛りだくさんということ
に

「え？ お宝！ みせてみせて！」

と紙袋の中身を見ようとする相模を材木座は抑える

「ダメダメ！ 相模殿！ その袋はパンドラの箱である！ 見たら希望も残
らぬ！」

「そいつの言うとおりだよ、見ない方がいい、大体予想が付く」

と川崎も海老名の趣味を理解している為、相模を止めるがそれを見て残念そうな海老名

「えーみんなで一緒に腐ろうよ？」

「御免被るわ！ だから相模殿もこつそり手を伸ばさない！」

と材木座は紙袋の中身をこつそり見ようとしたのを止められてふ
くれつ面になつてブーブー言つている相模を抑える
「ふーん、二人ともやけに仲いいね、そつか材木座君は相模さんを選ん
だんだ・・・」

「「は？」」

全員こいつ何言つてるの状態である。

「え？ 違うの？ だつて新館のところでどつち選ぶみたいな雰囲気に
なつてたでしょ？」

「あんた見てたの・・・それ誤解、こいつに色々世話になつたからってどんなお礼してほしか聞いてただけだよ」

と川崎が説明する

「なんだ、そつかーそうだよね、グループ内で恋愛はご法度だよね、変な雰囲気になつちやうしね・・・」

ちよつと暗い表情になつて俯く海老名

「ちよつと海老名さん? どうしたの?」

と相模が言うが

「うーん私の問題だし・・・」

と海老名は口ごもる

「あんたにも文化祭や体育祭で世話になつたしちょうどお礼がしたかつた所、何かの役に立つかもしれないから話しな」と川崎は海老名を見る

「い、いや、やつぱいいや! んじやあねー」

とその場を立ち去ろうとする海老名に川崎がさらに食いつく

「海老名! 修学旅行の班がなんか不自然に別れてるよね! どうせその件じやないの? あたしもそれに巻き込まれてんだけど? いいから話してよ!」

海老名は一喝されると足を止め、恐る恐るこちらを振り向く

「う・・・ そうだね・・・ 実は隼人君にも相談してるんだけど・・・」

と海老名は戸部が修学旅行中に自分に告白しようとしていることを伝える。

自分は付き合うつもりは無いけど、はつきりと告白を断つてしまふとグループの仲が今までと変わってしまうかもしれない、それは嫌なので告白自体を無かつたことにするか諦めさせることはできなかと葉山に相談したりしているけど上手くいくか不安だとのこと。

「はーリア充は大変だのう・・・」

材木座は例によつて他人事である。

「あたし、海老名の事見損なつたよ」

海老名から話を聞いた川崎が声を荒げる

「あたしは比企谷に振られると分つて告白して踏ん切りをつけた」

え？と海老名は驚いている

「もし逆だつたとしてもあたしはあんたみたいにうやむやにしようとはしない、自分でけじめはつけるよ、それに葉山？つて戸部？つて奴と傍から見ても仲いいし、男の肩持つに決まつてんじやん」

「そ、そんなことは無いと思う、きっと葉山君も……」

と海老名は反論しようとするがそれを制し川崎は話を続ける

「その諦めさせるつてのが葉山つて奴がうまくやつてあんたへの告白をあきらめさせるか無かつたことにした場合、戸部つて奴にばれたら二人の仲が悪くなると思うんだけどそれでもいいんだ？」

「そんなつもりは……」

そこまで考えていなかつたのか海老名は俯いてしまう。

「んじや修学旅行前にはつきりさせな、あたしも立ち会つてあげる」「う・・うん、でもそれだとうちのグループが・・それにさきさきがそこまでしなくとも……」

海老名はうなずくことは出来ない、それを見て川崎はさらにきつい口調で言う

「それこそあんたんところの葉山つて奴と三浦に仲を取り持つてもらえばいいでしょ？あの連中つてそんなこともできないの？」

「そんなにうまくいくかな……？」

「あたしはこの二人のおかげで比企谷とうまくやれてるけど？」

と川崎は材木座と相模の方を見る。

「まーね、ウチ川崎さんの為に頑張つたし？友達だし？」

とドヤ顔の相模だがうろたえる材木座

「え？我？なんかしたつけ？」

相模はそんな材木座の耳元に口を寄せてこつそりとささやくよう

に言う

「こういう時は自分もやつたとか言えればいいの！川崎さんの顔も立てあげて！」

あまりにも近いので少し赤くなり焦る材木座

「う、うむ！無論だ！この女子は我に『力が欲しい』と願つたのでなくれてやつたまでよ！我が名はジャバウオック!!世界のすべてを破

壊せん!!

相模が近すぎるるので照れて若干錯乱気味になる材木座

「世界壊してどうするのよ!」

そこに相模がすかさず突っ込みを入れる、そんな二人を若干呆れる
ように見る川崎

「・・・まあこんな変な奴らだけどさ、あたしは助けられたんだ、あた
しはあんたの事も友達だと思つて、友達の事考えてなにか問題でも
?」

そこまで言われると海老名は黙るしかなかつた。

第十二話

翌週の昼休み、またも新館近くの人気の無い場所にて

「相模殿、なんで我らまで」

「川崎さんは友達でしょ？あそこまで聞いたら見届けないと！」

と相模に言われまたもや木陰に隠れて事態を見守る羽目になる材

木座

「ほら来たよ」

材木座達が隠れているところから少し離れた方へ葉山、戸部、海老名、川崎がやつてくる

戸部と海老名が向かい合つて立ち、川崎と葉山は少し離れる。

「そ、それで、海老名さん、話つて？あと隼人君と川崎さん？もなんですか？」

戸部は若干うろたえて自分が置かれている状況を葉山に聞いてい るようだ

「俺達は立ち合い、戸部、覚悟を決める」

葉山はそういうと腕組みして黙り込む

「へ？」

頭に疑問符を浮かべる戸部に海老名が話し始めた。

「はじまつた」

相模がそう言うと材木座も黙つて事態を見守る。

海老名が戸部に近づき何か話をしている、最後に頭を下げ川崎との場から立ち去つた。

「うあーないわー、これないわー、ヒキタニくんにも相談に行つたのに、俺アホみたい……」

泣いているのか叫んでいるのか分らない声を出す戸部

「踏ん切り付いたか？今日は部活休んでいいから帰つていいぞ」

「いや出るつしょ！大体友達でいようつて言ってくれたから嫌われてる訳じゃないし！それに『今は』って言つてたつしょ？焦らず時間をかけることにするつて！だからこの気持ちボールにぶつけるつしょ！」

「そうか、んじや今日はお前だけ特別メニューだな！」

「やるつしょ！いやーマジ隼人君惚れるわー俺隼人君にマジ惚れだ
わー」

「・・・戸部、振られたからと言つてそれはどうなんだ？俺にそういう
趣味はない、やっぱおまえ帰れ」

「ちよつちよつと！隼人君！冗談だつてばー、え？なんでマジで逃げ
てんの？ちよつと冗談だつてー」

騒がしくその場から走り去る二人。

「八幡達にも相談してたのか？奴に彼女なんていたことないのに飛ん
だ無茶ぶりだな」

「・・・」

「どうされた？相模殿？」

相模は材木座をじーっと見つめている

「おーい？」

と材木座は相模の目の前で手を振るとそれにハツと気が付き
「ご、ごめん、あ、あのさ、明日もここでお昼食べるよね？」

「うむ、教室には我的居場所はないのでな」

「んじゃ明日何も買わないでここで待つてね！」

相模はそう言うと教室に戻つていった。

その日の放課後、材木座は原稿片手に奉仕部へと向かう
「たのもう八幡！久々にプロットを考えたぞ！」

「お断りだ、本を読むのに忙しい、そしてどこからかパクつたプロット
を持ち込むな、完成したのを持つてこい」

「あら？さきほど依頼が取り消しになつたから暇になつたのではなく
て？」

「ヒツキー、中二の相手してあげてよ、かわいそうだよ」

と二人に言われてやれやれと諦め顔の比企谷

「クソッ！仕方ねえ相手してやるから原稿用紙をよこせ、最近運動不足だからな、一度に何枚破れるか試させてもらう」

「酷いよ八幡！お主の力自慢の為に我の原稿を使わないで！つて依頼
取り消しとかどうされたのだ？貴様またなにかやらかしたのか？」

「ちがうわ！さつき戸部と海老名さんが来てだな……つてこれ以上は守秘義務つて奴で言えんな」

「そうね、せっかく色々買ったのに無駄になつてしまつたわ……」
と雪ノ下がテーブルに積み上げられた京都関連の旅行雑誌を見る
「いいじやん！三日目一緒に回るところ考えようよ！ほら！ヒツキー
も！こなんてどうかな！」

と由比ヶ浜が雑誌を広げて雪ノ下と見ている

「仲良きことは美しきかなという奴かのう……まさかもしや八幡は三
日目かの者たちと回るのか？」

「あ？ああ、流れでな？」

「そんな……てつきり我と回るのかと……この裏切り者ー！」

と叫ぶと材木座は走り去るのだつた。

次の日の昼休みまたも新館の所へやつてくる材木座、すでにそこには相模と川崎がいた

「言われた通り何も買わずに来たのだが……もしや！我の昼飯代を力
ツアゲしようと！」

「んなわけないでしょ、ほらそこに座つて」

呆れる相模と川崎、材木座が座ると両脇に相模と川崎が座る

「材木座君の食生活が大変な事になつているのが分つたのでウチらで
お弁当を作つてきました」

と二人は材木座へ弁当を見せる

「え？マジで？」

「あんただけじゃないから、みんなで食べるの」

と川崎は大きめのタッパーを開く

「ウチも頑張つたんだからほら食べてよ！」

と相模が箸でおかずを突き出してくるのでちよつと焦る材木座

「いいから、こういう時は食べてあげるのが男つてもんだよ？」

「え？ そうなの？ つて無理やり突つ込むな！……ムグー」

そこそこ大きい唐揚げを口に押し込まれ目を白黒させる

「残さず食べてね？」

「残したら承知しないよ」

　　という相模と川崎、もぐもぐと咀嚼をしながらふと材木座は思う
「あれ？なんかおかしくね？なんか我リア充じゃね？」
　　と疑問符を浮かべるのだつた。

　　その日の放課後

「しつれーしまーす」

「ちょっと失礼するよ」

「あれ？さがみんとさきさき？どつたの？」

　　相模と川崎が奉仕部にやつてきた。

「修学旅行の時に告白の手伝いしようとしてたつてちょっと耳にした
　　んだけど」

　　と川崎

「あ…ああそういうえばそうだつたな、もう無意味になつちまつたが」
　　振つた件もあつてこの手の話題になると比企谷は若干答えにくそ
　　うだ。

「あつそ、ほら！相模！」

　　そんな比企谷の態度はどこ吹く風で川崎は相模を急き立てる。

「本当にお願ひするの・・・？」

　　とても言いにくそうにもじもじしている相模に耳元で川崎がささ
　　やく

「ちようどいいから利用させてもらおうつて言つたのはあんたでしょ
！ほら！あんたの口から言えつて！」

「なんか物騒な単語が漏れ聞こえているんですけど・・・」

　　かなり不安そうな比企谷だつたが相模は意を決したらしく前に出
　　て頭を大きく下げる

「お願ひ！ウチにとつて特別な思い出がある場所を作りたいの、協力
　　して！」

「「はあ？」」

　　奉仕部に新たな依頼が持ち込まれる、そしてそれは戸部の依頼と似
　　て非なる依頼、自分にとつて特別な思い出の場所を作りたいから修学

旅行の時に告白する場所を選ぶ手伝いをしてほしいということだった。

それならどうなづく奉仕部の面々だったが、相模が告白する相手を聞いた時、皆の顔色が変わります考え直すようにと説得を始める始末であったという。